

世俗化過程におけるカルト宗教の位置づけ

櫻井義秀

一 問題の所在

一九七〇年代以降、日本は「新新宗教」「小さな神々」が続々と台頭してきた第四次の宗教ブームの中にあると言われている^(註1)。これらの宗教に共通した教義は、不幸の原因を霊の祟り・さわりに求め、霊界にうごめく悪霊・不浄霊・成仏していない先祖の霊などに憑かれたために、病気や不運な事故にみまわれたりしたのだと解釈し、こうした「悪因縁を切ったり」、「運勢の転換」を計るためには、「霊障を切ったり」「先祖供養」を独特の方法(術)でしなければならぬと唱える点にある。信者は、それぞれの抱える不幸の大きさによって、「霊界もの」雑誌・単行本を講読したり、観てもらおう、ローカルなカミサマに祈ってもらおう、特定教団の信者となり修業したりと様々なレベルにある。とりわけ、不幸らしい不幸を背負いこんでいない若者の間に、神秘・呪術ブームは大きく裾野を広げている^(註2)。

他方、伝統的宗教の衰退、新興宗教の既成化・沈滞、信仰の困難さなどに言い表される宗教の世俗化は、現代の高度産業社会では普遍的な傾向でもある。宗教学の領域においても、社会と宗教の変動過程の理論と例えば、世俗化論である。マックス・ウェーバー以来、近代化にともなう宗教の変容は、世俗化(脱魔術化)という言葉で表されてきた。その意味するところは、現象・行為についての神話・呪術的理解から、原因―結果の因果的理解、或いは目的―手段の意味的理解へと理解の方法が転換され、従来宗教の果たしてきた役割

(世界観・エートス形成)の力が弱められてきた、というものである。世俗化論は、多かれ少なかれこの脈路で語られ、人類が科学的・合理的認識を持つにつれて宗教の支配領域は狭まり、この進展は不可逆的なものであるとする。ところが、近代化・合理化の最も進展している地域に、反近代・非合理主義的な宗教がいつのまにか出現してきた。なぜか。

まず、その理由を考える前に、この新しい宗教の隆盛を世俗化の逆転と考え、世俗化論の枠組みを見直すか、或いは、あくまでもこの現象を従来の理論枠組みの中で捉えるのか、出発点を明確にしておかなければならない。結論として、本稿は、世俗化は進行しつつあるという立場をとる。これらの宗教は世俗化された社会に寄生しているに過ぎず、世俗化の流れを逆転させる力は、教義の中にも教団の中にも本来備わっていない。むしろ、世俗化された現代社会と親和性を持つために、発生し、存続しているのである。寄生・功利主義・個人主義という特徴が、新しい宗教と現代社会との結節点である。これについての説明は三章以降、なぜこの様なカルトが流行するのか、その理由と併せて考察したい。その前段階として、本論では世俗化をどう定義し、カルトは世俗化過程のどの段階に位置付けられるのかを理論化しておきたい。

註一 新新宗教とは西山茂氏の命名によるもので、第二次世界大戦中・後、急速に教勢を拡大した、創価学会・生長の家等の新興宗教の後に出てきた新宗教という意味である。小さな神々は、朝日新聞の連載記事の表題(一九八四年)からとられたもので、一九七〇年代に入って、霊能者の教祖と数十人の信者で構成された小規模の宗教団体をいう。札幌では「太陽を信じるピラミッドの会」がとりあげられた。

註二 西山は、若者が神秘・呪術的行為、または霊・術系宗教そのものに惹かれていた要因の一つに、若者の「飼い殺し」の状況を挙げている。彼らは、学校から職場まで階層化され、管理化された社会の中で、大人になることを急がされることもなく、豊かを享受するだけの退屈な日常に、実際のところ飽き飽きしているのである。戦争での非日常性への遭遇・緊張などは、過去かヨソのことではしなく、青春を燃焼させるような仕事への没頭、生活の重みなどもなく

二 世俗化とカルト

なり、レジャーで暇を費消するだけの生活しか割り当てられていない現実には、若者はうんざりしているのではないかと、さりとて、みずから事態を打開する気力もないし、自分の将来を見てしまったと思いついでいるものは、霊界という非日常性に自閉するのがせいぜいなのかもしれない。西山茂他『現代人の宗教』有斐閣、一九八九年。二〇—二二〇頁。

世俗化論には様々なアプローチがあるが、本論ではトーマス・ルックマンの世俗化理論をとる^(註三)。世俗化とは、「聖なるコスモスに由来している規範から社会構造の様々な部分が次第に自立していく過程」である^(註四)。と彼は世俗化を定義する。彼の理論の独自性は、宗教を特殊化された意味体系、或いは特殊化された社会的制度と固定的に捉えないで、個人と社会を媒介する、意味の解釈という過程（機能と言ひ換えてもよい）を宗教の本質とした点にある。そうすると、人間が社会的生活を営む限り、宗教は決してなくならないのである。しかし、社会の分化という歴史的な変動過程において、特殊化された制度としての宗教の意味の妥当性構造が聖の領域に限られてきてしまった。従来の世俗化論は、この聖俗分離の状態に世俗化を見たのであるが、彼は普遍的な世界観（正当化の機能を果たす象徴世界）から、下位の様々な制度が分化、自立していく過程を世俗化と呼んだのであり、聖俗分離は世俗化過程の歴史的一局面でしかないのである。

個人の意識面における変化として、制度の分化（社会変動による生活世界の複数化）は、個人の広範な生活領域の構造化にむしろマイナスに働き、生き方全体を方向づける意味世界は与えられない。しかし、社会がシステムとして活動し、存続する最低の条件だけは制度化されている。これを第一次的制度とすると、現代では機能的合理的メカニズムが該当しよう。ところが、これを人生や生活の意味付けに使える程人間自身は合理化

されておらず、様々な情念を処理する別の意味世界を欲している。こうした欲求は個々バラバラであり、これに應える意味世界は私的なものでしかなく、個人にその妥当性が限定される。現代の人間は、消費者のニーズに應えるポーズをとったマーケティングで供給される（主観的には私だけの）意味を消費しているのである。これら消費者の欲求を充たすさまざまな意味のパッケージが市場に出まわり、個人は好みにあわせてそれらを購入することで生活を有意義にしている。もちろん、モノの購入はモノに付随している記号の購入でもある。このように私的に消費される意味世界は、二次的な社会制度と考えられる⁵⁵⁾。現代では思想のみならず、宗教表象さえも選択的に購入されているとみられる。こうなると究極の意味世界は、個人の領域に限定されざるをえない。そういうわけで、現在、宗教は全く個人的な信仰の領域、私的な世界観でしかなくなったのである。しかし、人間として生きる以上、たとえ、意味の妥当性が個人にまで収斂してしまったとしても、個人にとって包括的な意味の体系は必ず必要である。伝統的な宗教制度がそれを与えなければ、別の領域に求めるであろう。近年、対抗文化として生まれたカルトがその役割を担ってきたが、カルトもまた私的世界にしか成立の基盤を持たないのである。カルト宗教の隆盛は、消費社会における功利的個人主義が蔓延した社会状況の中でとらえる必要がある。なお、アメリカのカルト宗教に関しては別稿で触れているので参照されたい⁵⁶⁾。

註一 一般に、宗教研究には、歴史的制度論・実体論・機能論の三つのアプローチがあり、それぞれの立場で世俗化論が展開される。歴史的制度論の世俗化論では、伝統的教会宗教の衰退をもって世俗化と考える。教会という宗教組織、ないしは制度を宗教と同一視すれば、教会出席率の低下を実証的に分析することで、教会の衰退を説明できる。次に、実体論の世俗化論では、「聖なるもの」「超自然的存在」への畏敬の念が失われつつあること、または、それらを信じ続けることが困難になってきた状況を語る。伝統的宗教の生活上での世俗化である。第三の機能論的世俗化論は、ブライアン・ウィルソンらによって主張される。現在の社会的諸制度は宗教による正当化なしに存在し、制度的基盤づけは、むしろ法、組織的合理性すなわち官僚制、テクノロジーによってなされる。宗教の機能は、もっぱら世界観を

個人的に提供するだけ、行為の意味付けのみに限定され（顕在的機能）、往時の社会全体に整合的な意味世界を付し、社会システムの維持に機能する（潜在的機能）宗教は、こと西欧世界に関する限り失われたようにと考える。トーマス・ルックマンの考察は、以上三つの各論に至る総論的なものであると思われる。ブライアン・ウィルソン「現代社会における宗教の機能」『東洋学術研究 第十八巻第三号』中野毅訳、東洋哲学研究所、一九七九年。

註二 トーマス・ルックマン『現象学と宗教社会学—続・見えない宗教』ディヴィッド・リード他訳、一八七頁。Thomas

Luckmann, *Life-World and Social Realities*, Heinemann Educational Books Ltd., 1967, p. 117.

註三

「本質的なアイデンティティ」への欲求を充たすために、アイデンティティの市場が現れ、それを二次的の制度が供給する。個人はその市場に提供されたアイデンティティの消費者であり、こうしたアイデンティティのいくつかは適度に永続性を持っているが、その他のものは流行遅れになることが計算されているのではないかと思われるほど、全く流行に左右されている。この市場への供給者である二次的の制度は、アイデンティティのマーケティングの多様な媒介者であり、そのいくつかは、マス・メディア、宗教的組織、そして結婚、子供の養育、その他の私的活動に関する専門家たちの連合体といった具合に競合しているのである。」ルックマン、同書 一六九頁。Luckmann, p. 124. もちろん、二次的の制度の妥当性の領域は様々であろう。大方の認める色と欲という古典的価値から、トライアストロン、ヒマラヤ登山といった、やってみないことには分からない禁欲的なものまで自由に選び得る。マーケティングの領域では既に、作って売るから、消費者の欲求にあわせて作る、なければ欲求を作り出させる、モノの販売からアイデア・情報の販売へ転換している。現代思想と呼ばれる知識も例外ではない。

註四 櫻井義秀「市民宗教研究序説」北星学園女子短期大学紀要第24号、一九八七年、七二—七三頁。

三 社会への寄生—欲望と不安の利用—

現在、日本において隆盛している霊・術系カルト宗教を、公式セクター（行政制度・公認された知識）で解決不可能な問題を非公式に処理するセクターとして理解する立場がある^{註五}。例えば、運勢を占ってもらう人

の心理では、易者に自分の将来を予測してもらい、それをヒントに生活スタイルを変えていくほどの気持ちはあまりなく、自分が抱いているある種の期待・予感を強化してもらいたいのである。超自然のお告げの方が普通の人のアドバイス（カウンセラー）より強化の程度が強いのは言うまでもない。しかし、その内容を額面通り受け取るのではなく、自分の都合に併せて取捨選択し、思わしくない占いの場合は、別の占いに足を運ぶ。こうした心理状態は決して異常なものではない。人がルーティン化されていない行為をなすとき、自分で行為の結果への予測、目的に対する手段の合理的整合性等を判断しなければならぬ。もちろん、現代では当人になりかわって種々のサービス機関が代行してくれる。しかし、最後の決断は自分である。問題は、その決断を正当化する知識・意味付けの枠組みを持っているか、仮りに持っていたとしてどれだけの人がそれに妥当性を与えてくれるか、である。世俗化論で述べたように、最終的な意味付けは、個人のレベルに収斂してしまい、個人は雑多な意味のマーケットからお好みの商品を買ってくるだけである。つまり、恣意性を免れない。しかし、恣意的決断に不安を感じない人は希なのではないか。ここで、行政のサービスを頼むことはできない。なぜなら、万人向けのアドバイスは、公共性の高い知識・合理的説明に終始するしかなく、他ならぬ私の最後の一步を踏みださせてはくれないのである。ここに、非合理的・個別主義的宗教の入る余地、有り体に言えば、商売が成立する。

さて、一九八〇年代は、投機の時代であったと言われる。企業は円高と好況で余った金を不動産と株に投資し、地価高騰と株価の上昇で膨れあがった資産を背景にさらなる投資を行い、経済のパブル化の代償に空前の好景気をもたらした。都市圏に住み、土地の錬金術の恩恵を受けた庶民は、ニューリッチとして大量消費時代の先端を走る。マスコミはマネーゲームを煽りたて、一億総相場師になったかのように経済情報を送り続ける。財テク・消費、経済至上主義が肩で風切っている間に、日本の中流社会の幻想はもろくも崩れ去った。金が全ての世の中で、金がないほど不安なことはない。欲望と不安が錯綜する現代を象徴する事件が二つある。豊田

商事事件と靈感商法である。ここでは、靈感商法にみられるカルト宗教の社会的寄生の側面を検討したい。

靈感商法の実態に関しては、朝日ジャーナルが一九八五年から精力的に取材を続けている。これは、統一教会と原理運動参加の若者達をルポした続編であるが、統一教会が日本での活動の中心を、新規の信者をリクルートすることから資金獲得に転換していったことと軌を一にしている。かれらはターゲットを若者から老人・主婦に換え、膨大な金を吸い上げていったのである。もっとも、統一教会では教団の活動として一切の経済活動を否定している。壺・印鑑・人參茶等の製造・販売は、〇〇株式会社の社員が従事しているのであるが、彼らが統一教会の信者であることは元信者の証言などを通じて明らかになっている。宗教法人と収益事業を形式上分離しているにすぎず、その事業内容は、公益にはなはだ遠いというのが実態である。

靈感商法が豊田商事の金券商法と一線を画していると考えられるのは、売手と買い手との合意が利殖ではなく、宗教的付加価値とでも言うべきものにあつた点にある。原価数千円の壺が数百万円の付加価値を付けられて全国に売り捌かれた。購入の動機が開運や、健康の回復であつたにせよ、御利益を買うにしては少々値がはる。経済的な不安や家族関係の悩みにまいつている被害者の精神状態を極限まで追い詰め、壺や数珠の靈驗あらたかを説得し、商品の購入を勧めたところにこの商法の悪質さがある。消費社会における欲望の直接的な表現である金ではなく、このような社会の歪を背負っている人々の漠然とした不安につけこんだのである。欲望にせよ不安にせよ、現代の社会意識がこの手の悪徳商法の温床になつたことは事実である。

しかしながら、強引な説得・巧妙な泣き落としだけで数百万の金を引き出すことは無理である。靈の崇りに対する恐れが最後の半歩を踏み出させたのではないか。それが靈感商法一流のくすぐりであつたにせよ、信じ込まされていくプロセスは、非日常的な出来事・不幸の原因を崇りのせいにする解釈図式が、被害者の意識に予め埋め込まれていたか、既存の生活意識に親和性の高いものでなければ、このような商法は成功しないように思われる。ここで誤解を避けるために一つ留保を付け加えたい。崇りの信仰はそれ自体病理ではない。靈感

商法の崇りは、日本における伝統的な先祖祭祀の様相を呈していても、似て非なるもの、宗教とは結びつかない崇りのための崇りでしかない。しかも、営利を目的にした非社会的活動である。この点において、靈感商法の崇りは病理的なのである。靈感商法の実態に関しては、別稿で報告してあるので、ここではその勧誘の手法と、どのようにして被害者が壺を買うにいたったかのプロセスだけを紹介しておく。

靈感商法は、原則的に訪問販売から始まる。手相を観る・印鑑を勧めるなどから関係を作っていく、霊場と称する壺・多宝塔の展示即売場に誘うのである。特に、被害金額が甚大で、しかもやり口が悪質な例をあげると、一人暮らしの老人にすりより、親身な世話をして安心させ、家と土地を担保に金融業者から金を借り、壺や印鑑を買うことを勧めるケースがある。その場合、被害金額は一千万円をこえることがざらである。北海道消費者協会では、販売会社レックスが、ガンを宣告された一人暮らしの女性に壺一個と印鑑を土地・屋敷と引き替えに買わせていたケースを扱っている。このような靈感商品を購入する被害者の動機は、先祖・水子の供養、近年亡くなった肉親の供養が半数を占め、次いで脅かされて恐怖に陥れられた結果購入を余儀なくされてなどである。供養は崇りを鎮めるためであるが、被害者を崇る・不幸になると脅迫し、極度の不安状態に陥し入れ、壺や多宝塔を買う以外助かる道はないと説得し、半ば朦朧とした状態で契約を結ばせる。その典型的パターンを示すと、35歳の女性が、「女系家族で男が跡をつけないのは、水子・色情狂の壺がついているためで、男の子を授かるために先祖供養しなければならぬ。壺を買いなさい」と午後の六時から午前一時まで七時間にわたり説得されている。また、ある女性は「長男に離婚問題が起きたのは、先祖に女性問題で罪を犯した人がいたからだ。徳を積まなければならない。徳を積むというのはお金を積むということだ。生命保険を解約すれば金は出来る。」と言われ、翻意しがたく契約している。

霊場では、霊能者・先生と称する販売員がそれらしき装束に身を包み、霊界や運勢のことを延々と話す。そして、先祖の霊を降ろしたりもする。被害者は霊能者が色々と自分のことを知っていると驚くが、その殆

どは先刻販売員が聞き出しておいたことであり、「ヨハネトーク」と呼ばれる誰にでもどれかは当てはまりそうなかたりのマニュアルの応用である。その異常な雰囲気や数名の男性・女性の販売員が盛りあげ、一対多で説得にかかるのである^{註四}。

このように、靈感商法の説得のプロセスは極めて作爲的な状況を演出することで被害者を精神的混乱に陥れ、契約させたといっても言い過ぎではない。しかし、これほどまで霊・運勢といった言葉・イメージに惑わされる心理・意識も無視できない。少なくとも、霊場の脅迫のプロセスに至るまでには、かなりの程度靈感商法の崇りや運勢の考え方に共鳴していたのである。また、家族・親族・近隣関係に相談するものを持たない、孤立した主婦・老人が被害に合うことから、被害者は元々何らかの問題を抱えていたが、相談相手も見つけられないままに、非公式なセクターに救済を求めたのであると言えよう。さらに、いかほどの宗教的付加価値がついていようと、壺を持つ、印鑑を代えることによって、開運したり、病氣・難題が解決すると思ひ込むのは、彼らが弱者だっただけでなく、モノを所有することで幸福が得られると思ひ込まれている現代人の心理がつつかれたからでもある。究極のモノは金であるが、いろんなモノを所有することで、そのモノに付随する記号・意味をも所有していく。いまや、モノを所有せずに他人に理解可能な意味を示すことは不可能であり、価値観も、意識もバラバラで恣意的なものである。唯一共有している言葉、マネーで語りあい、誰にでも見えるモノを身につけてその記号を発信し、ひたすら消費することで自分が何者であるかを示そうとしているのではないだろうか。被害者は幸福の壺を所有することで、幸福が得られると思つた。

靈感商法の被害総額はこれまで三〇〇億を超えたという。それを資金源の一部として統一教会は様々な活動をしているわけである。統一教会（正式名称、世界キリスト教統一心霊教会）の教義・理念によれば、この世俗社会はサタンの支配下にあり、現代のメシアである教祖を中心とした神聖政治を打ち立て、地上天国をつくるのがこの教団の将来構想である。神の国建設のためには、サタンの所有物はどのように利用してもかまわず、

むしろ、自分たちが使うことでこれらの物質は浄化され、差し出す人に徳を積ませているのだという。サタンの世界にはサタンの策略を用いるのだそうだが、どのように合理化しようと、悪徳商法は悪徳商法である。物質万能主義（無神論）を排しつつ、現代の神の不肖の子（マネタリズム）のあがりでのいである現実是否定できない。所詮カルトは現代社会・文明を否定しながら、その果実は十分に味わっている。カルト宗教の寄生の側面である^{〔註五〕}。

註一 塩原勉「現代日本における組織化の諸形態」『組織科学』第二巻四号、一九八八年。

註二 櫻井義秀「消費者被害―靈感商法の現状を中心に―」『地方中核都市の社会病理に関する学際的研究―札幌市の場合―中間報告書』札幌市社会病理研究会、一九八九年。

註三 朝日ジャーナル、一九八六年二月二十六日、一四―一五頁。

註四 前掲書、一九八九年二月五日、六一―一頁。

註五 日常的な生産活動に従事しない既成宗教は、全て寄生的側面を持っているが、その多くは既存の社会制度の枠内で、公認された宗教サービスを提供しており、相当の対価が払われることになっている。その意味で、挑戦的カルトの自己矛盾は避けられる。なお、カルト宗教の寄生的側面に関しては、ブライアン・ウィルソン『現代宗教の変容』井門富一夫他訳、ヨルダン社、一九七九年、一四八―一四九頁。Peter Berger Brigitte Berger Hansfried Kellner, The Homeless Mind, VintageBooks, 1977, p. 33, p. 33 高山真知子他訳『故郷喪失者たち』新曜社、一九七七年、二五三頁、二六〇―二六一頁。

四 操作主義・功利主義・個人主義

—術・現世利益・自己開発—

現代社会を形作っているイギリスの功利的個人主義及びアメリカのプラグマティズムの伝統が、カルトにも見られる。これは、アメリカのカルト宗教だけに言えることではない(註)。靈術系新宗教に特有の「術」は、憑いたものを落とす、汚れを祓う、運を付ける等、捉えがたいが確実に状況に影響を及ぼしている本来見えな「氣」とでもいうべき存在を、あたかも物のように扱う。神道、修験、シャーマニズムなどの民族宗教に由来するこの伝統は、庶民にとってわかりやすく、受け入れやすいものであろう。現代のテクノクラシーにおいて、モノ・情報共に操作の対象であり、政治経済の諸活動は一定の裁量を与えられながらも、基本的には相互管理されているといえる。世界経済を左右する金融市場は、予測がつかない将来をも操作の対象に含めてきている。このように、操作という概念は現代人にとってなじみの深いものになっている。

かつては、運勢を操作するというくだいそれは市井の民の考えることではなかったし、また、やれるのは、並々ならぬ修業を積んだ徳僧か、異形の陰明師等と相場は決まっていた。ところが、こうした能力を促成するマニュアルを作り、希望者に広く頒布したり、実演指導等で「術」を普及させたのが、靈術系の新宗教団体であった。特許使用料としての上納金、組合費、或いは全くの寄生により、これらの教団は瞬く間に大神殿と教団組織・事業体を形成したのである。しかも、かなりの信者を既成新興宗教から引き抜いた。その理由は、身体性の問題に関わる。

宗教は理屈というより体験である。ただ信じるというのは難しいが、病気が直った、家業が盛返した、受験

に合格した等の実感に支えられた「わざ」への信頼は強い。能書きはともかく、利くか利かないか試してみても判断してくださいというのが、靈術師であり、普通の人は、どこかのカミさまか知らないが利く方がえらいと考える。未だ見ぬものを信ぜよ、という方が本来無茶なのである。この考え方は、操作主義のそれに等しい。結果から判断せよ。結果を生み出すのに有効であったものをとれ。それを思想とせよ。まさに、靈術系の宗教はこのようにして判断され、信者獲得に成功したのである。

もっとも、御利益に訴えるのは日本の伝統的宗教の常套手段であり、新興宗教は元々貧・病・争の中で剥脱感を持つ下層の人々に現世利益を訴えて今日を築いたのである。しかし、草創期の信者の二世・三世が青年層を構成している状態では、癒しはそれほど魅力的ではない。そもそも一世が頑張ってくれたおかげで、生活はまずまずになったし、教勢拡大のために折伏大行進をせずとも、安定多数なのである。エスタブリッシュされれば、教団運営は経営になり、組織は官僚機構を導入せざるをえなくなる。当然、草創期のようなラディカルな主張は出来なくなる。このように世俗化された既成宗教教団で、新しい信者、特に青年層を惹きつけるのは、世俗社会が若者にアピールするやり方と同じなのである。世直しの世が共有されていない以上、個人に訴えるしかない。

功利的個人主義に宗教色を付けた種々の人生指南書の個人向け販売である。自己の実現「人間革命」、自己の発見「いんなあとりっぶ」が青年層をリクルートする新たな戦略になっている。個人のアイデンティティの確立は、重要なテーマであるが、人間形成と宗教がいった場合、かつては理想とする人間像をまず最初に示すのであったが、今は何のための自己実現かを明言しない傾向にある。世界平和とか国際交流、有機農法など世俗的価値を漠然と示し、活動をアピールする。そのため、手段であった諸活動がひとり歩きしている大教団もある。

また、このようなアイデンティティ発見型宗教の世俗化された形態として、自己開発セミナーの隆盛がある。

元々は、カール・ロジャースのエンタウンターグループに端を発し集団治療や企業の幹部候補生訓練などに用いられていたセミナーを大衆化したものである。参加者は、過度に社会化された自分の殻がはぎ取られ、解放されることでカタルシスを味わう。その際、赤裸々な自分の内面を曝け出した一種の連帯感で、感動的な交歓を体験したり、新たな自分の姿を発見したりする。大都会で長時間労働に従事する若いサラリーマン(むしろ、エリートであることが多い)に需要が高く、都心のビルで二泊三日八万円からのコースがある。これらのセミナーの宣伝広告を電車の広告などで見ることはまずなく、参加者がセミナーの中で、その感動を伝える実習として友人・知人を勧誘するのである。自己開発セミナーは、宗教を名乗らないだけで、自我の破壊、再生、伝道といった要素を全て含んでいる。

もはや、宗教だけが宗教の役割を果たしているのではない。意味・価値のパッケージ販売は、レジャー・趣味・『ビクトゥモロー』等の処世術誌などの他の個別的な社会制度と競合しながらなされているのである。カルト宗教も店頭に出された商品の一つに過ぎない。

以上、世俗化過程におけるカルト宗教の一部を概観してきたが、結論として、カルト宗教、霊術系の新新宗教の隆盛は、宗教への回帰現象でも復古現象でもなく、宗教という特殊制度化された社会組織の形態を取りつつも、現代の社会制度の枠内で他の社会組織同様の機能を果たす(時として、逆機能)一集団の活動に他ならないと言える。実際、カルト宗教の特徴は、寄生性、操作主義、功利的個人主義であり、現代社会の経済合理主義の体制の中でこそ存立しえているのである。

註一 一九六〇年、一九七〇年代、アメリカ社会に刺激を与えたカルト集団は、結局それ以上の影響をアメリカに与えることは出来なかった。そして、現在隆盛なのが、社会への挑戦も、隠遁もせず、自己改革・自己発見を目指すカルトである。これらは、教団としては極めて緩やかな構造を持ち、成員権に関してもうるさくない。脱人会が頻繁である。

付 記

そして、参加するものも共同体的な人間関係を求めているのではなく、自己の開発だけが目的である。しかも、これまで自分が築いてきた、家族・職業上の経歴との軋轢がない。つまり、これらのカルトを功利的個人主義が貫徹した経済合理主義・競争社会の避難所の機能（いやし）を果たす一方、個人の能力を高め、生産性を増すという点において、功利的個人主義にたいする親和性を持つ。デイヴィット・ブロムリー、アンソン・シュウプ『アメリカの新宗教事業』稲沢五郎訳・ジャブラン出版、一九八六年。

註二 二澤雅善『人格改造—都市に増殖する闇のネットワーク「自己開発セミナー」—』潜在人体験記』二〇〇出版局、一九九〇年。

本稿は、世俗化論と宗教の回帰現象との関係を考察する試論を提出するためのノートの内容である。そのため、カルト宗教についての理論的分析は今後の作業であり、論点の骨子を書留めておいたにすぎない。不十分な点を補い、次稿に期したい。なお、本稿の一部は、一九八九年一二月のパラダイム研究会にて報告し、貴重な助言をえた。記して、感謝します。

Cult Religions in the Process of Secularization

SAKURAI YOSHIHIDE

This paper reviews recent sociological literature on religion in a secular age. Secularization has resulted in a loss of credibility for traditional established religions. This process, promoted by science, technology, and utilitarian thought, seems irreversible in modern society. However the emergence of new religions and the popularizing of mystical spiritual thought, especially in the 1970s and 1980s in Japan, contradict this secularization theory. How can these phenomena be interpreted?

Apparently the revival of religion has reversed the trend towards secularization, however, the author concludes that cult religions are a step in the process of secularization. Because the characteristics of cults are 1) parasitic (not self-sufficient financially, or even in dogma, and dependent on the established secularized society they rejected), 2), pragmatic-oriented (glorify the usefulness and effect of cure rather than belief) and, 3) individualist-oriented (their main concern is not social reform but self-interest and self-development).